



CODE

Letter

2011.7.1 VOL.42

(特活) CODE海外災害援助市民センター発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702
e-mail: info@code-jp.org URL: <http://www.code-jp.org/>
郵便振替: 00930-0-330579

2011年度基本方針

17回目の「1・17」を終え、2011年度を迎えるための諸作業に追われていた矢先の3月11日、M9.0を記録する東日本大震災が発生しました。北は青森から南は千葉県までの500km以上にわたる太平洋沿岸に大津波が発生し、災害史上希にみる大規模災害となりました。亡くなられた方々には心から哀悼の意を表するとともに、遺族の方々には心からお悔やみ申し上げます。また、未だ十分とは言えない環境のもとで避難生活をしてられる被災者のみなさんにも、心からお見舞い申し上げます。

この大災害は東電福島第一原発にも致命的な打撃をもたらし、史上最悪の複数原子炉のメルトダウンを引き起こし、未だ事態収束への見通しを見いだせない危機的な状態が続いています。原発周辺住民は半径20キロ圏内には立入禁止を発令し、30キロ圏内には強制避難を勧告する事態にまで発展し、膨大な原発災害避難を強いています。巨大地震と巨大津波災害に原発災害が重なる空前の複合災害となりました。被災者である中学生は、卒業式で「神は私たちになんと厳しい試練を与えるのか」と嘆きました。

CODE海外災害援助市民センターは1995年の阪神・淡路大震災以来、主に海外で発生する災害に向きあい、被災者救援と人間復興を柱とする被災地の復興に積極的に関わってきました。今回の未曾有の国内大災害の前に「CODEは何ができるのか」を考えてみました。

まず私たちは、阪神・淡路大震災以来、CODEの構成団体でもあり国内の災害救援を主として担ってきた被災地NGO協働センターを通して可能な限りの支援をすることを決め、併せてこれまでの経験知を惜しみなく提供することを確認しました。

CODEが阪神・淡路大震災を含め、これまでの災害を通して学んだことを振り返ると、第一は「減災」を具

現化することでした。減災は災害を力でねじ伏せるのではなく、災害とひるむことなく向き合いながらも、災害をやりすごす力を身につけることではないかと気づいてきました。また、災害をやりすごす力を養うには、何よりも自然を尊び、自然と共存することを根底に、一人ひとりを尊重する理念を持ち続けなければなりません。その上で大量生産・大量消費・大量廃棄というライフスタイルも見直さねばなりません。

しかし、これらのことは阪神・淡路大震災ですでに気づいていたはずでした。いま私たちに問われていることは、この16年間の歩みをもう一度振り返り、現実から目をそらすことなく、未来を見据えて災害に立ち向かうことです。もう「負の遺産」を次の世代に残してはなりません。

まずは急がなければならない被災者の「暮らしの再建」へ、全国の仲間とともに可能な限りの支援の方策を提案し、被災者自らの力で成し遂げる復興への道筋づくりをサポートすることを誓いたい。16年前に掲げた「神戸宣言」を読み返し、あらためて「新しい社会システムを創る力を養おう」と呼びかけたい。

地震や津波を人の力で止めることはできないが、致命的な被害を受けないよう減災に努めることはできる。しかし、人知で核の暴走を止めることができない原発災害を繰り返すのはもうごめんだ。原子力発電に頼るのではなく、時間がかかっても英断をもって再生可能な自然エネルギーへの転換をはかることが、「私たちにできること」ではないだろうか。

そのためには、やはり「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」行動を重ねながら、一步一步、確実に、安心して安全な、平和な社会を築くことに叡智を注ぐことを決意したい。

2011年6月11日 事務局長：村井雅清

2010年度の主な事業報告と 2011年度の主な事業計画

< 災害救援プロジェクト >

アフガニスタン救援プロジェクト

【2002年7月17日からの継続事業】



棚式栽培で収量アップ

アフガニスタン、ミールパチャコット地区のぶどう農家の復興を支援する「ぶどう基金」は、2003年6月、約300万円を原資として288世帯への融資から始まりまし。協同組合をその運営主

体とし、融資によって農家の生計向上を支えてきました。1年周期で返済されたお金をまた別の家族に貸付け、2011年4月時点までで延べ489世帯が利用。延べ融資額は約450万円となりました。

2007年から2009年にかけてはJICA草の根技術協力事業（地域提案型）として農業技術研修が行われ、アフガニスタンから来日された研修生6名は、ぶどうの有機栽培のための剪定方法や、棚式での栽培、水の問題を解決するための点滴栽培、病気の解決法などを山梨県と兵庫県で学びました。その後研修生は積極的にこれらを地元へ伝えてい。特に「棚式栽培」を現地で採用したところ、収量が2倍以上も増えたそうです。羊や鶏の糞で堆肥を作るなど工夫が進み、なかには、難しい有機栽培に挑戦しようという農家も出てきています。

2011年度も引き続き「ぶどうオーナー」を募集し、ぶどう協働組合運営の支援を行ってまいります。

ジャワ島「呼び水」プロジェクト

インドネシアジャワ島中部の中心都市であるジョグジャカルタ市から約40km離れたグヌンキドル県内のナワンガン集落。2006年に中部ジャワ地震の被害を受けたこの集落は、県の水道管から1km離れ、以前から乾季の水不足に悩まされてい。復興支援の延長としてCODEが費用を支援し、村の人は「ゴトンロヨン」と呼ばれる助け合いにより水道の枝管を建設（2008年4月）。乾季でも日常生活に必要な最低限の水が安価で手に入るようになりました。

これを「呼び水」として、地域の貧困と水問題の解決につなげていくことを目指しています。アフガニスタンに続き、復興支援から、持続可能な暮らしを支援するプロジェクトです。JICAの草の根技術協力事業（草の根支援型）への応募に向けた打合せ・調査も引き続き行っています。

既にナワンガン集落では、少しずつ資金をプールして小規模融資が始められ、ナマズの養殖、唐辛子の栽培、山羊の飼育などコミュニティの経済的自立に向けた活動が始まっていることは以前からお伝えしてきました。

2010年7月CODEの訪問後は、パートナーであるエコ・プラ

ウトさんの勤めるデュタ・ワチャナ・キリスト教大学（ジョグジャカルタ市）も協力してくれることになりました。農業や生物学などの専門家が集落を訪れ、地域に適した植生などについて助言されています。2011年度も引き続き、集落の主体的な取り組みを尊重しながら、事業としてのサポートへつなげていきます。

四川地震救援プロジェクト

【2008年5月12日からの継続事業】

2008年5月の地震発生以来、スタッフ吉椿雅道を現地に派遣し続けてきました。当初から寄り添い続けてきた北川県光明村を含む同県香泉郷に、同郷政府と合意して（2009年4月）「総合活動センター」を建設することが決まりましたが、急遽、これは中国共産党によって建設が為されるという方針転換となりました。その後村人との協議を重ね、CODEは「老年活動センター」の建設を決定。2010年11月には芹田代表が調印式に出席しました。

「木造の家は壊れにくかった」という体験をアピールできる耐震のモデル建設とし、高齢者の娯楽室・運動用スペース、子ども向け図書室のほか、建物の骨組みをみることができる「震災展示室」を設置します。村おこしにつながる活動の拠点としても活用が期待されています。

震災発生から3年経ちましたが、2011年6月26日、やっと着工となりました。小雨の降る中、9時過ぎに村人に見守られながら重機の手が入りました。この日行われたのは、（1）建設用地に入るための小道路の確保、（2）道路下に埋設する水道管のための掘削、（3）建設用地（トウモロコシ畑）の拡張、（4）建設用地にある水溜の埋設 などです。今後の工程としては、土地の整地、排水管路埋設、家屋の基礎などに約1週間、その後、家屋建設に入ります。竣工は、2ヶ月後の8月26日の予定です。完成のご報告をお待ちください。



用地の拡張工事

ハイチ地震救援プロジェクト

【2010年1月12日からの継続事業】

ハイチ地震は、全人口の3分の1以上が被災するという大災害となりました。地震後、CODEはこれまで何度も協力いただいているメキシコ人研究員クワテモックさんを現地に派遣。首都ポルトープランスから40kmほど離れたレオガンで医療キャンプ立上げなどに取り組みました。

2011年1月からは、被災したハイチ人自身の団体「ACSIS」とともに、被災した女性が起業によって暮らしを再建するための資金を貸し付けるマイクロファイナンス（小規模融資）を開始しました。ハイチではもともと露天商などの小規模事業が経済の中心を占めており、地震直後から被災者がたくましく商いを始めていました。このプロジ

エクトによって女性たちは食料品や日用品を売る店を始め、投資資金を少しずつ回収しながら返済しています。詳しくは同封の別紙「プロジェクトニュース」をご参照下さい。

2011年度も、ACSISの事業をサポートするとともに、その他の支援の可能性も含めて情報収集を続けていきます。

東日本大震災支援

東日本大震災の支援について、CODEは村井理事が代表を務める被災地NGO協働センターの活動をバックアップすることになりました。人的・資金的な支援に加え、これまでCODEが培ってきた知恵とネットワークを活かして協力していきます。

被災地NGO協働センターは、地震発生当日にいち早くスタッフを被災地に派遣、調査と支援にあたってきました。詳しくは同封の「プロジェクトニュース」をご参照下さい。

いま力を入れているのは生きがい・仕事づくり「まけないぞう」。被災者がつくる、ぞうの形をした壁掛けタオルです。

阪神・淡路大震災、新潟中越地震などの被災地でも被災者が



まけないぞう

つくり続けてきました。これをつくることで気が紛れたり、「自分も人の役に立てる！」と元気になる方もいます。1頭400円で販売し、うち100円をつくり手さんにお渡します。残り300円から材料費や発送費の実費を除き、次なる支援、特に仕事づくりの取り組みに活用させていただきます。まけないぞうのお求めは4頁をご覧ください。

< ネットワーク作りに関する活動 >

神戸学院大学とのコラボレーション事業

2007年度より、神戸学院大学社会貢献・防災ユニットとCODEとのコラボレーション事業として、授業企画および講師派遣を行っています。2010年度も「社会貢献論」の前期課程15回を担当し、「CODEが担う社会貢献について」、「減災サイクルともう一つの社会」、「ジェンダーと災害」などの講義を行いました（村井理事）。2011年度も「社会貢献論」の前期課程15回を担当しています。

また、同大学浅野壽夫教授の「海外実習II」では2008年に続き2010年にもCODEのインドネシア「呼び水」プロジェクトの実施場所であるナワンガン集落を訪問されており、今後も情報収集等において連携していきます。

< 「市民による災害救援」に関する調査・研究事業 >

CODE寺子屋セミナー

2010年度は次の通り開催致しました。

- 6月23日 「中国・青海省地震報告会」(吉椿雅道)
- 6月25日 「最底辺の10億人の国～ミレニアム開発目標からみたハイチ」(浅野壽夫さん)
- 7月9日 「NGOは誰を代表するのか～『最後の一人』まで」(芹田健太郎代表理事)

8月1日 「ハイチ地震の被災者によるグループ“ACSIS”の支援活動～ハイチから学ぶ～」

(ピエールマリさん・岡智子さんご夫妻)

10月11日 「CODEのインドネシアプロジェクトについて～ナワンガン村の農村開発の可能性～」

(エコ・ブラウオトさん)

11月28日 「ハイチの歴史に学ぶ」(濱忠雄さん)

とんだばやし国際交流協会主催、JICA大阪共催、

CODE協力

2011年度は未定ですが、特に東日本大震災に関する活動報告などを、被災地NGO協働センターと連携して適宜行ってまいります。

2011年度の総会が開かれました

6月11日(土)、兵庫県民会館にて2011年度総会が開催されました。正会員22名(うち委任状12名)名、オブザーバー2名で、議案である2010年度の事業報告・決算、2011年度の事業計画・予算について審議が行われ、すべて承認されました。総会報告資料をご覧になりたい場合は、ホームページをご参照いただくか、事務局までご連絡下さい。

今後ともみなさまからのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。

< 2011年度運営体制 >

代表理事：芹田 健太郎 神戸大学名誉教授/愛知学院大学教授

副代表理事：室崎 益輝 関西学院大学総合政策学部教授
災害復興制度研究所所長

副代表理事：水野 雄二 (財)神戸YMCA総主事

理事：黒田 裕子 支援プログラム部会長/阪神高齢者支援ネットワーク理事

理事：野崎 隆一 ガイドライン部会長/神戸まちづくり研究所事務局長

理事：山添 令子 市民参画部会長/コープこうべ常勤理事

理事：榎木 恵子 人材育成部会長/関西NGO協議会事務局

理事：藤野 達也 (財)PHD協会総主事代行

理事：松本 誠 市民まちづくり研究所所長

理事：村上 忠孝 財務部会長・村上環境住宅研究所所長

理事：吉富 志津代 多言語センターFACIL代表

理事：藤野 一夫 神戸大学大学院国際文化学術研究科教授

理事兼事務局長：村井 雅清 被災地NGO協働センター代表

監事：中川 和之 時事防災リスクマネジメントWeb編集長

監事：飛田 雄一 (財)神戸学生青年センター館長

活動記録 2010/12/1～2011/6/11

12月2日 JICA研修受入「途上国におけるコミュニティ復興における耐震建築の普及」(村井理事)

12月8日 龍谷大学社国際NGO論の講義(村井理事)

12月10日 ひょうご震災記念21世紀研究機構の研究会「災害対策をめぐる国際協力仕組みづくり」に参加(村井理事)

12月16日 関西NGO協議会理事会に出席(村井理事)

12月28日～ JICA・関西NGO協議会「NGO組織強化のためのアドバイザー派遣」を受ける(全7回)(岡本)

- 1月9日 TeLL-NETフォーラム実行委員会に参加(細川)
- 1月13日 浄土真宗本願寺派たすけあい運動募金より
青海省地震への寄付を受領(村井理事、吉椿)
- 1月14日 関西NGO協議会、パナソニック労働組合連合会に
ハイチ活動報告(岡本)
- 1月18日 国際防災シンポジウム2011「コミュニティ防災の挑戦：
気候変動適応への道のり」(UNCRD等実行委員会
主催)でアフガンぶどうプロジェクトを報告(村井理事)
- 1月20日 堺女性大学で講演(村井理事)
- 1月26、31日、2月1日 県立楠高等学校で講義(岡本)
- 1月29日 ひょうご防災リーダー講座で講演(村井理事)
- 2月4日 ひょうご震災記念21世紀研究機構の研究会
「災害対策をめぐる国際協力仕組みづくり」に
参加(村井理事)
- 2月12日 TeLL-NETフォーラム実行委員会に参加(細川)
- 2月15日 神戸学院大学 安心・安全社会システム研究会で
講演(村井理事)
- 2月17日 CODE理事会
- 2月25日 JICA・関西NGO協議会「NGO組織強化のための
アドバイザー派遣」最終回で全体報告会
(村井理事・岡本・細川)
- 3月9日 JICA兵庫「ハイチ研修」に参加(岡本)
- 3月11日 コープこうべハート基金運営委員会でアフガン報告
(村井理事)
- 3月16日 コープこうべでハイチ報告(野崎理事)
- 3月22日 JICA兵庫のハイチ研修で講義(野崎理事)
- 4月18日 CODE 理事会
- 4月21日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義
(村井理事)
- 4月28日 同上(村井理事)
- 5月12日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義
(藤室玲治さん)
- 5月19日 同上(村井理事)
- 5月21日 関西NGO協議会総会に出席(細川裕子)
- 5月26日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義
(斉藤容子さん)
- 6月2日 同上(岡本千明)
- 6月9日 同上(村井理事)
- 6月11日 CODE理事会・総会・CODEの夕べ

ありがとうございます 2010/12/1 ~ 2011/6/11

**会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略)
一般寄付(災害救援は除く)**

森和子、山本綾美、春日千明、西田照代、大江良一、鶴飼愛子、神田心一、宇城シズ子、塚本謙三、小林まゆみ、鄭惠姫、山本良治、河知秀晃、大野武子、日本ストアー・サービス若林成一、小林孝信、浅井里依子、坪谷令子、中村覚・佳代子、斉藤茂樹、嶋田裕子、南真知子、株式会社サンバリア100今川比呂史、西覚寺仏教婦人会、加藤雄司、水嶋勉、土屋芳久、おーまきちまき、成毛典子

会 員

・ **正会員**

個人：草地とし子、中川和之、飛田雄一、牧田稔、村井雅清、山崎達枝

・ **賛助会員**

個人：山田昌弘、DT&COMPANY関本大介、安藤尚一、永松寛喜、阿久澤悦子、北浦和志、野本英晴、木下洋子、貫名美鈴、三島宣彦、水野浩重、山川たかこ、黒田達雄、中谷勇一、岩崎信彦、遠周龍子、岡本芳子、平田康、おーまきちまき、岡田雅幸、宇田川規夫、山崎清、室崎益輝、市丸仁一、前畑美智子、菊田歌雄、兵頭晴喜、江口節、高橋智子、藪口隆、牧田稔、水平企、鈴木有、鶴飼愛子、中山巖、森田茂、川添則昭、上田耕蔵、武田節子、斉藤容子、鈴木嶺

団体：阪神医療生活協同組合、シチズンシップ共育企画、アートサポートセンター神戸

募集情報

寄付のお願い

各プロジェクトへの寄付を募集しています。ご支援いただくプロジェクト名をご記入の上、郵便振替でお送り下さい。なお、いただいた寄付のうち15%を上限として管理費に充てさせていただきます(ただし、東日本大震災の支援金は、全額を被災地NGO協働センターに委託します)。

ボランティア募集

事務所で発送作業や自宅での翻訳など、CODEの活動に参加してみませんか? ご興味のある方はお気軽にご連絡下さい。

「まけないぞう」のお求め&一本のタオル運動

まけないぞうをお求めの方は、TEL・FAXまたはメールで お名前送り先 電話番号 お求めの個数をご記入でご連絡下さい。

1頭400円です。お届け時に振込用紙を同封致します。

9頭までのお買上げの場合は送料をご負担願います。10頭以上の場合は発送者負担です。

被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL : 078-574-0701 FAX : 078-574-0702

E-mail: ngo@pure.ne.jp URL http://www.pure.ne.jp/~ngo/

“一本のタオル運動”

~まけないぞうの材料となるタオルを募集しています~

新品のみ下記の宛先にお送り下さい。色柄問いません、広告は片端のみOKです。各地への材料輸送等のために、タオル1枚につき10円のカンパにもご協力をお願いしております。

〒651-2271 神戸市西区高塚台431

Chimei-Innolux,TPOディスプレイズジャパン株式会社気付被災地NGO協働センター

同社はボランティアでスペース提供とタオル仕分けにご協力下さっています。



CODE のハイチ地震支援プロジェクト

ハイチ地震 (ハイチ政府・UNOCHA 発表)

日時: 2010年1月12日午後4時53分(現地時間)
 震源: ハイチ共和国・首都ポルトープランス南西約17km
 規模: マグニチュード7.0
 被災者: 約350万人
 死者: 22万2570人
 負傷者: 30万572人
 避難者: 約230万人(最大時)
 損壊家屋: 18万8383戸(うち全壊:10万5000戸)



地図: ジャパン・プラットフォームより

(1)メキシコ人研究員クワッテモックによる支援

CODE は地震直後からメキシコ人研究員のクワッテモックを現地に派遣し、8~9割の建物が倒壊したレオガンという街で、次のような活動を行ってきました。

ラジオでのメッセージ発信

ラジオ関西との協力で集めた日本人からのメッセージ約50通を、1月下旬から2月上旬にかけてハイチのラジオ(レオガンのRadio Cool, ポルトープランスのRadio Caraibeなど5局)から被災者に伝えました。例えばこんなメッセージを届けました:



クワッテモック(右から2番目)と施設の子どもたち

<被災地から見守っています!!>

私たち神戸市民は、15年前に大震災を経験しました。ハイチの大地震による多くの方々の被災に、私たちは胸を痛めています。家族を失い、ケガをし、家をなくし、どれほどつらくたいへんなご状況か、想像しきれません。しかし、いま同じ被災地として、ハイチの皆さんの痛みを共有し、見守っています。

私たちも震災で計り知れない悲しみを体験しました。それを人と人との支え合いで乗り越えてきました。ハイチでは一部暴動などが報じられていますが、地震で壊れた町をさらに人が荒廃させるようなことが起こらないよう祈っています。このようなときこそお互い支え合い、尊い命を大切にされ、今後の再建に力を注がれることを応援しています。日本全国の人々も、同じように応援しています。

ハイチを応援する KOBE 市民より

避難キャンプやモバイルクリニックのコーディネーター

1月下旬から2月にかけて、レオガン市内の壊れた病院、Cardinal Legerの敷地を拠点にAyuda a Haitiなど他の支援団体と連携して医療キャンプの立ち上げを行いました(後にTシャツ工場跡地に移設)。日々約700人の診察が行われ、クワッテモックは非医療スタッフとして、被災者のニーズと支援者とのマッチングに大きな貢献をしました。残念ながら10月下旬から流行し始めたコレラで、これまでに32万人以上が感染、5300人以上が亡くなっています。このキャンプでもコレラ予防対策に努めてきましたが、引き続き大きな課題となっています。

孤児院訪問

クワッテモックは2月から5月にかけての現地滞在中、レオガンおよび、その約15km東のグレイエという街にある5つの孤児院をそれぞれ週1回程度訪問し、被災した子どもたちが楽しめる様々なアクティビティを企画しました。歌やゲームだけでなく、映画の上映やジャグリング教室を行った日もあります。

(2) ACISIS を通じた支援

ACISIS(アクシス)について

首都ポルトープランスの北、ラブレンという地域で活動している団体です。大阪府在住のハイチ人シャシャ・ピエールマリさんが、友人のルシアンさん(代表)らと設立しました。彼ら自身も家族や友人を亡くした被災者です。被災直後から物資配給などの支援を行ってきました。



ACISIS メンバー、ピエールマリさん

女性向け小口融資事業

ハイチではもともと露天商などの小規模事業が経済の中心を占めています。地震直後から早くも多くの露店が再開し、被災者がたくましく食料品や日用品の買いを始めていました。2011年1月に開始したこのプロジェクトでは、弱い立場に置かれがちな女性の被災者が生活を再建できるよう、融資によって起業を支援します。

対象者： ラブレン地域に住む、女性の小規模事業主 40名

内容： 事業再建資金 150～300US ドルの貸付 ビジネスに関するトレーニングを実施

仕組み： ・利子を含めて、毎月28～60ドルを6ヶ月間かけて返済します。

・参加者は5人グループをつくり、事業ノウハウの助け合いや、返済の促進を行います。

・ACISIS が各参加者の店舗を定期的に訪問し、アドバイスを行います。

経過： 最初の返済日にはまだ投資が回収できていなかったため、期日を予定より2週間延ばしました。

期日3月26日に37名が返済、残り3名も10日以内に全員が返済しました。

参加者の声

Azor Gaelleさん(写真)：私や地域の人たちのビジネスを支援してくれてありがとう。あの震災後ハイチをサポートしようという気持ちを持ってきている日本人に本当に感謝している。この支援は家族の生活を再スタートさせるために大きなものである。3月に起きた日本の地震に対して心が痛んでいる。



Azor Gaelleさん

Exantus Vignaさん：地震後ずっと支援してくれている日本の方に感謝する。日々の生活のためになる商売ができてとても救われている。初めての経験です。

Alfred Marie Yoleneさん(写真)：片足を失った女性。地震後多くの困難と共にあるハイチの女性を心配してくれる日本人がいてくれてとても嬉しい。障害を負ったけど生きることも商売も続けていく。それは日々生きることを許されているということです。



Alfred Marie Yoleneさん

Decena Marie Carmelさん：私がいったい何をしたというのか。もう希望も持たなくなっていた。でもここに日本人の支えによって多くのハイチ人のために ACISIS のプログラムが始まった。いま生活を再出発できることに感謝する。

CODE の東日本大震災支援

3月11日に発生した東日本大震災により亡くなられたお一人おひとりのご冥福をお祈りすると共に、ご遺族の方々にはお悔やみを申し上げます。そして、被災された皆様、福島原発の事故により避難されている皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

CODEは、これまで海外の災害救援で築いてきた知恵とネットワークを活かしつつ「被災地 NGO 協働センター」の活動を人的・資金的にサポートする形で、東日本大震災の支援を行います。同団体は阪神・淡路大震災におけるボランティアを機にできた市民団体で、CODE 理事・事務局長の村井雅清が代表を務めています。震災で気づいた支えあい、学びあい、寄り添いという原点を大切に、1995年以来、国内外の被災地の救援活動を行ってきました。同団体はこの原点にそって、被災された方のいのちと暮らしに寄り添う支援を行っています（詳しい活動内容は裏面をご覧ください）。

CODE に届いた海外からのメッセージ

私たちは阪神・淡路大震災以降これまで様々な地で海外の災害救援を行ってきました。その度に私たちが言ってきた言葉は「困ったときはお互いさま」でした。今まさに海外の友人たちから励ましのメッセージが寄せられています。

「私たちはこの度の関東・東北で起こったことに大変悲しみを感じています。毎日ミール・パチャコットの人々から様子はどうかと問い合わせが来ています。この学校の生徒たちは、日本を支援しようと募金を始めました。

でも、私たちは日本政府がこの危機を乗り越えてくれる力を持っていると信じています。アフガニスタンのテレビでも、毎日そちらの様子が報道されています。アフガニスタンの人々は、まるでこの災害がここで起こっているかのように、我が身のことに悲しんでいます。」

（アフガニスタン、ルトフ・ラフマン）

「我々ハイチ人は、日本人の英知を一瞬にして破壊した地震と津波の被害そしてそれによって生じた苦しみが共に消え去るまで共に戦いつづけます。立ち上がり、輝き続けてください！同じ被災者として、日本人が再び勇気を取り戻してくれることを願います。“みんなともだち”。

世界中のどんな場所でもこのような災害下では誰もが同じ脅威にさらされます。我々みんなでも乗り越えていきましょう。地球規模の共同体をつくることで、どんな孤独も乗り越えらると信じています！」

（ハイチ、ルシアン・ソドゥ）

「親愛なる日本の友達へ。度重なる地震、また大地震が起こした津波、これらの災難を聞いて驚いています。多くの方が犠牲になったこと、また多大な財産の損失が生じた事に深い同情を感じております。私は2008年に起きた5.12四川大地震で自宅が倒壊したばかりか、3人の家族を失くしました。この災難の中で、私は多くの日本の友達の助けをもらいました。彼らへの感謝の気持ちは永遠に私の胸にしっかりと刻まれています。日本がこのような大きな災難に遭い、心よりお見舞いを申し上げます。生存者の方々が一生涯に暮らせるよう祈っております。日本の方々が一日も早く災難を克服しますように。町を築き上げ、次なる幸せな暮らしを一刻も早く迎えられるように。」

（中国・四川、彭開富）

「世界中がこの予期せぬ地震と津波にショックを受けています。多くの命を失い、インフラを破壊させてしまいました。個人的にも多くの日本の機関と関係してきた私にとって大変つらいことです。どうぞ私たちの団体や私にできることがあればいつでも声をかけてください。同時にこの地震を直接的にも間接的にも受けた日本の何千もの兄弟姉妹に対して哀悼の意を表します。」

（バングラデシュ、サイドゥール・ラーマン）

この他にも、インド、パキスタン、スリランカ、インドネシア、メキシコから多数のメッセージをいただきました。